

『山月記』の周辺

明治大学法学部教授
加藤 徹



『山月記』と中国の原話

中島敦の短編小説『山月記』の原作が、中国の『人虎伝』であることはよく知られている。

『人虎伝』は、唐の張説の伝奇短編集『宣室志』の中的一篇「李徴」（『太平広記』巻第四二七に収録）に脚色を加えたもので、撰者は李景亮に仮託されている。

中島は、中国の原話を下敷きにしつつ、細かい点はかなり変えている。原話の李徴は唐の「皇族の子」で名門だが、中島は李徴の家柄については削った。人食いドラに変身してしまった主人公が、旧友と偶然に再会してかわす会話の内容にも、中島は脚色を加えている。

ヒトが発狂してトラに変身する、という怪談は中国的だ。ちなみに西洋では、トラの代わりに、ヒトがオオカミに変身する現象を指す「リカントロピー」(lycanthropy)という専門用語があるほど、人狼説話が多い。

トラが多かった昔の中国

今の中国に野生のトラはほとんどいない。ロシアとの国境の近くに、アムールトラが、細々と生き残っている程度である。かつて中国の広大な地域に生息していたアモイトラも、保護区以外の野生種は絶滅した。

人口が少なかったころの古代の中国では、野生のトラが数多く生息していた。漢文の故事成語にも「狐、虎の威を借る」「三人、虎を成す」「苛

政は虎よりも猛なり」などトラはよく出てくる。

「三人、虎を成す」は紀元前四世紀ごろの魏のたとえ話。一人が「市場にトラがあらわれた。」とデマを言っても誰も信じないが、そんなデマでも三人が言うと思ってしまうかもしれない、という人間心理の危うさを指摘した戒め。

「苛政は虎よりも猛なり」は、山東省の泰山の麓の故事。義父と夫、息子を相次いでトラに殺された女性が、墓の前で号泣した。孔子が「なぜ引越さないのですか？」と聞くと「苛政がないからです。」と答えた。山東省あたりも、昔は人食いドラがたくさんいたのだ。

北宋の末を舞台にした古典小説『水滸伝』でも、武松(ぶしょう)の虎退治とか、李逵(りき)が虎に母親を食い殺される話が出てくる。

明や清の時代になると、人口の増加や農地の拡大が進み、中国本土では人食いドラの話はあまり聞かなくなる。

『山月記』は、まだ野生のトラが豊富に生息していた八世紀の話である。

『淮南子』にも出てくる

『山月記』の李徴は、ストレスのあまり発狂し、トラに変身する。オオカミでもクマでもなく、トラである。実は発狂してトラに変身した事例は、李徴が初めてではない。

前二世紀に成立した漢文古典『淮南子』は、故事成語「塞翁が馬」の典故としても有名だ。

この『淮南子』倣真訓に、公牛哀という人物が病気でトラになった事件を載せる。

「昔公牛哀軫病也、七日化為虎。其兄掩戸而入覘之、則虎搏而殺之。是故文章成獸、爪牙移易、志與心變、神與形化。方其為虎也、不知其嘗為人也。方其為人也、不知其目為虎也。二者代謝舛馳、各樂其成形。」

訓読で読み下すと「昔、公牛哀の軫病するや、七日にして化して虎と為る。其の兄、戸を掩ひて入りて之を覘へば、則ち虎は搏ちて之を殺す。是の故に文章は獸と成り、爪牙は移易し、志は心と与に變り、神は形と与に化す。其の虎と為るに方りては、其の嘗て人為るを知らざるなり。其の人と為るに方りては、其の且く虎為るを知らざるなり。二者代謝し舛馳して、各々其の形と成るを樂しむなり。」

だいたいの意味は「昔、公牛哀という人がいた。（春秋時代の魯の人、という説もあるが、この人物の詳細は不明である。）彼は「軫病」つまり人間以外のモノに変化するという奇病にかかり、七日目にトラになった。公牛哀の兄は、部屋の扉を少しあけ、中の様子をうかがった。すると、トラと化した弟は兄に打ちかかり、殺してしまった。皮膚や爪や牙などの外見だけでなく、心もすっかり野獣になってしまったからである。このように、トラになる時には自分がかつてヒトだったことを忘れ、ヒトとなる時には自分がいつときトラだったことを忘れる。両

者はぐるぐる逆向きにめぐりつつ、自分の現在の形態を樂しんでいるのである。

中島敦の脚色

『淮南子』という本の執筆スタンスは、「塞翁が馬」の故事のくだりもそうだが、プラスもマイナスも一連の連続したものとしてみとらえて遠觀しよう、という道家思想の色が濃い。人生の吉凶禍福も、歴史の治乱興亡も、自然界の生流転も、実は連続した流れなので、自分の好きなどところだけを切り取れない。どれが良くどれが悪いという判断も、人知が及ぶところではない。莊子が「胡蝶の夢」の寓話で説いたように、現実と夢の区別すら絶対的なものではない。そんな主張のなかで「牛哀、虎と化す」の故事が出てくる。

中島敦が描く李徴は、次のように語る。

「いったい、獸でも人間でも、もとは何かほかのものだったんだろう。初めはそれを覚えていたが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいたのではないか？」この独白は原典にはなく、中島の脚色である。その口吻は『淮南子』の「其の虎と為るに方りては、其の嘗て人為るを知らざるなり。其の人と為るに方りては、其の且く虎為るを知らざるなり」と、少し近い。

中島が描く李徴は、人としてのアイデンティティーに未練をいだき、苦しむ。「ああ、まっ

たく、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！ おれが人間だった記憶のなくなることを。」ここは、『淮南子』の「二者代謝し舛馳して、各々其の形と成るを樂しむなり。」という遠觀とは対照的だ。

靈獸におけるトラの位置

トラは実在の動物だが、靈獸でもある。いわゆる「四神」は東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武を指す。実力伯仲の英雄の争いを「龍虎の戦い」と呼ぶ。トラはオオカミやヒョウ、クマなどより格上である。

その一方、トラは地上に生息する動物であるため、龍や鳳凰、麒麟などハイクラスの靈獸よりは格下である。中国の歴代王朝の皇帝と皇后は、それぞれ龍と鳳凰になぞらえられた。龍たる皇帝に仕える精銳部隊は「虎賁」（虎奔つまり勇躍奔走するトラ）と呼ばれた。

李徴は龍ではなくトラになった。一介の人間が、皇帝の象徴でもある龍に変身するのは、説話といえども中国では不自然である。なお『龍の子太郎』の主人公の母親はヒトから龍に変身するが、これは民話ではなく、故・松谷みよ子氏による創作童話である。

『山月記』は、一見すると荒唐無稽な変身譚だが、「自分」という存在の本質的な危うさ、という人間のリアルを浮き彫りにした傑作である。人は誰しも、「虎」になりうるのだ。